

児童の特性を生かした指導や学び合いの工夫

秋田県由利本荘市立矢島小学校 教諭 鈴木 裕美

I 実践に当たって

前任校である、由利本荘市立西目小学校の知的支援学級には、昨年度6年男児1名、1年男児1名の計2名が在籍しており、一人一人の実態をしっかりと把握し、特性や力に合わせた学習を構築し取り組んできている。今回の実践は、1年男子児童に対しての取り組みである。

本児は入学前の発達検査によると、発達年齢が3～4歳程度、興味・関心に偏りがみられるものの、虫の知識が豊富で虫博士と呼ばれるほどであった。さらに、算数面では、10までの数の順唱や物を数えることができ、数に関する認知力は国語面に比べ、高い様子が見られた。

虫博士の知識を生かし、本児のもつ手先の不器用さや運動発達のアンバランスさも補いながら、苦手な文字の読み書きが意欲的に習得できないか考えた。

また、算数ができるよさをさらに伸ばすことも考えた。そのためには、他の考えや感じ方に触れる機会を意図的に設定し、学びを広げたり深めたりする体験が大切であると考え、自閉症・情緒障害学級の1年女児と学び合う「なかよし算数」を設定した。

1年女児は、自閉症スペクトラム障害であるが、こだわりが比較的薄く、朗らかで何に対しても意欲的で言語力が高い。反面、数の概念が曖昧で算数が苦手と、正反対な二人が学び合うからこそ互いに刺激を受け、個の力が伸びるのではないかと仮定した。

II 実践内容

I 虫の豊富な知識を生かした国語科の学習

文字のよさとは何だろう…。聴覚だけでは情報が消えてしまうが、文字にすることで視覚的に情報を得ることができるし、情報の意味まで正しく理解でき、伝えることも可能である。本児にとって文字学習とは、国語力を高めるだけでなく、自分の世界を広げることにつながると考えた。

(1) 『ぼくの あいうえお むしずかん』をつくろう！

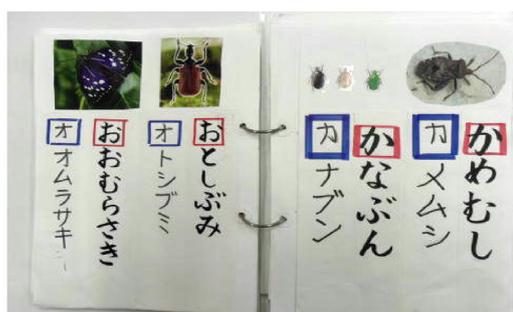
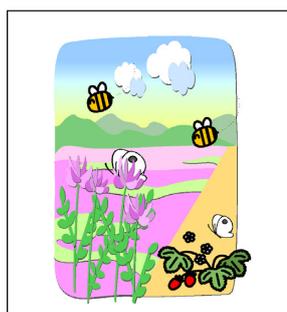
虫が大好き！虫の名前の知識を生かし、文字とマッチングすることで、ひらがなを習得できないか考えた。

導入で昆虫図鑑を見せたところ、高い関心を示した。そこで、『ぼくの あいうえお むしずかん』をつくろう！と誘いかけ、本単元をスタートし、完成した図鑑を自閉症・情緒障害学級の1年生に紹介することを単元のゴールに設定した。

本児の好きな虫の順番で、図鑑やPCを活用して虫の正しい名前を調べたり、写真を準備したりし、写真に合わせてひらがなで名前を書いていった。初めは教師が書いた字をなぞることから始め、慣れてくるに従い、自分であいうえお表で調べ、一人で書けるようにした。書いた名前はあいうえお順に綴じた。ひらがなが完成した後は、同様にカタカナを記入していった。

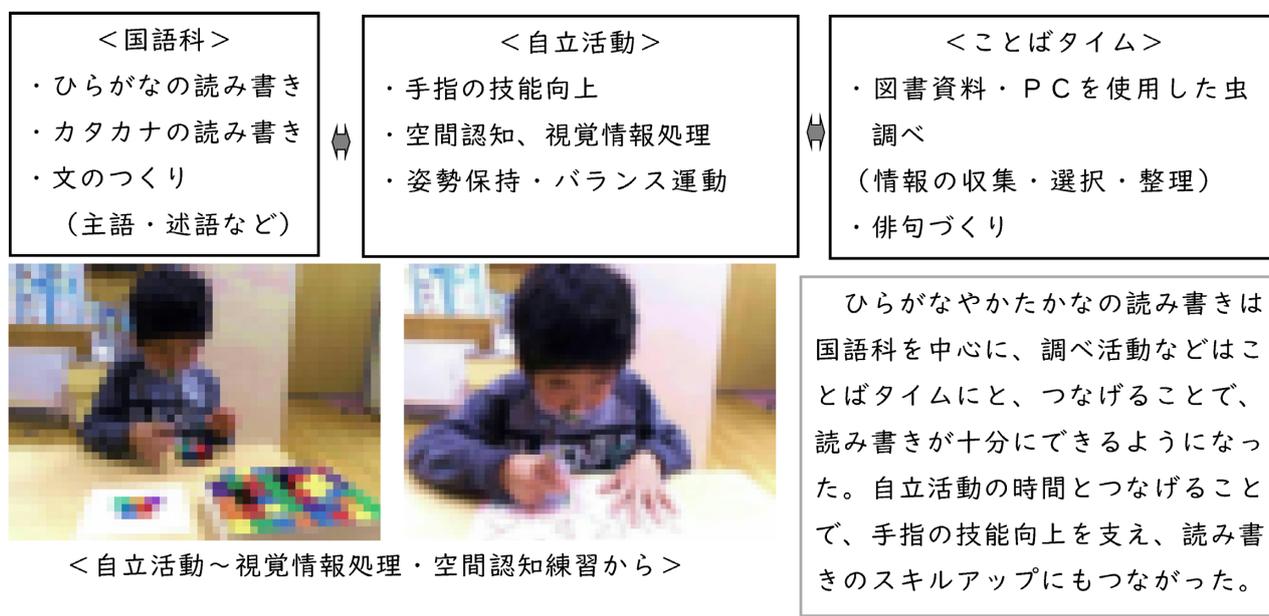
完成後、自閉症・情緒障害学級の1年女児紹介したところ、女児が虫に興味をもち、休み時間に一緒に見て、積極的に会話するようになった。教室に展示すると、遊びに来た交流学級の児童も見て、本児を褒めてくれるなど、虫図鑑がきっかけになり、交流が広がった。

文字の習得により、読書へも関心が広がり、自分で好きな絵本を選択して読むようになった。



(2) 国語科と自立活動・学校独自の活動とつなぐ

通常、言語事項においては、特設の時間を設けたり、とりたてて指導したりせず、単元に合わせて無理なく指導を行うが、手先の不器用さや運動発達のアンバランスさに配慮し、その力を補いながら、楽しく確かな力が身につけられないか考え、国語科と自立活動の時間や、朝の活動時間（ことばタイム）とつなげて指導を行った。



2 人との関わりを通して、数学的な活動を楽しみ、多様な表現法や考えに気付く算数科の学習

子ども同士が関わり合いながら算数の学習ができるように、単元や学習内容によって自閉症・情緒障害学級との「なかよし算数」を設定した。学習意欲を高めるだけでなく、数学的な表現を用いて伝え合ったり、他の考えに触れたり試したりして、数学的なよさを学び合うことができるようにした。

(1) 「すうじたんけんへ れっつ ごお！」

「なかまづくりとかず」「なんばんめ」「あわせていくつ」「ふえるといくつ」の小単元をつなげ、大単元を設定した。両児がプリンセス好きであったことから、両児のキャラクターを作成し、双六のように、楽しく算数学習が進められるように工夫した。

自力解決では、指やブロック等、自分で選んだ方法で取り組み、学び合いでは自分の考えを紹介し合った。その際、教師がアレイ図・具体物・数直線等を併せて提示し、様々な数学的表現に触れることができるように配慮した。友達の影響や教師が支援をしたことを取り入れて試し、よいと感じたことをまとめた。回数を重ねると、図・数直線等が自分で使えるようになっていった。

単元のゴールでは、自閉症・情緒障害学級の3年生がサプライズ登場し習熟問題を出題した。

授業は大いに盛り上がり、3年生は知識・技能を活用し下級生に教えるよさを味わうことができた。1年生も、楽しんで学習内容を復習することができ、達成感・成就感を味わうことができた。初めて、トリプルのやりとりも経験することができた。



ペアで見通しをもつ



自力解決(指)



自力解決(ブロック)

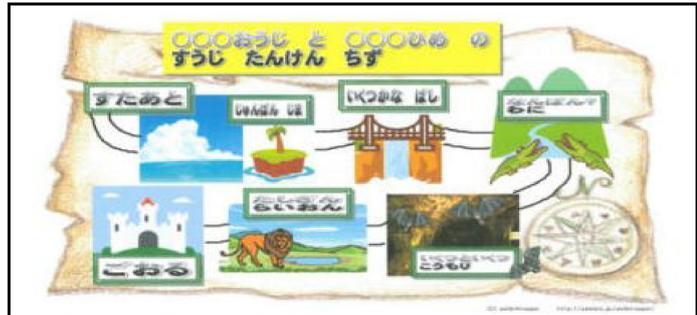


学び合い



習熟問題を出題

地図



Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

(1) 文字学習を通して表現すること・伝えることの喜びを育む

児童の興味・関心を生かすことで、最後まで意欲的に学習に取り組むことができた。苦手だった文字がスムーズに習得できた背景には、自立活動やことばタイムとの連携効果があったと考える。ことばタイムの俳句づくりでは、季節に合わせて図鑑の虫が俳句に登場し、児童の思考においても確かに往還していると思われる。音声言語として蓄積された知識が、文字と結びつくことで、表現すること、伝えることの喜びや達成感を伴った学びとなった結果ではないだろうか。

(2) 学び合いで数学的な活動を楽しみ、多様な表現や考えに気付く力を育む

柔軟に単元を構成し、ペアやトリプル学習を取り入れることで、数学的な活動や表現に親しみながら、多様な考えにも触れることができた。相手意識や必要感があるからこそ、主体的に学び、「算数が好き」「算数が得意」と自信につながり、理解や定着につながったと考える。互いによい刺激を受け、その結果、人に関わる力や個々の算数の力が伸びた。

2 課題

国語科では、文字学習を中心にを行い、虫の名前が表記された図鑑の完成させたが、主語・述語の学習で作った短文も、載せられるような工夫ができれば、文字を活用して表現するよさをさらに実感できたと考える。また、自立活動や他教科等とつなげる場合、目標や内容等よく吟味して計画的につなぐ必要があると感じた。

算数科では、単元や学習内容によって柔軟に単元を構成し、弾力的に「なかよし算数」を行ったが、一年間を見通し、しっかりと計画に位置づけて実施することも考慮していきたい。特に算数科は系統性が明確である。その特性を踏まえた上で、単元を構成したり、学び合いを設定したりしたい。さらには、実生活とのつながりも重視し、生きて働く力に育てたいのものと考える。